

日本学術会議第二部会（第24期・第2回）議事要旨

日時 平成30年4月3日（火）15:00～16:30

平成30年4月4日（水）10:00～12:00

場所 日本学術会議6-A（1）（2）会議室

出席者（敬称略）

（58名）

秋葉、東、天谷、池田、伊佐、石川、石塚、磯部、市川、巖佐、今井、遠藤、大杉、岡部、小川、小田切、甲斐、神尾、川人、菊池、経塚、熊谷、小松、小安、近藤、佐治、塩見、澁澤、城石、高井、高木、武内、武田、丹下、丹沢、戸田、南條、仁科、西村（い）、西村（理）、平井、古谷、寶金、松田、松本、真鍋、水口、光富、三村、宮崎、向井、村川、望月、森、安村、山極、山脇、吉岡

各会員

（事務局：山石、岩村、勝間田）

開会：事務局が定足数を確認し、開会した。

議事概要：

1. 議事要旨の確認

第1回の議事要旨が了承された。（資料1）

2. 各機能別委員会、分野別委員会からの報告（資料2）

基礎生物学、統合生物学、農学、食料科学、基礎医学、臨床医学、健康・生活科学、歯学、薬学、環境学委員会の10の委員会からこれまでの活動について報告があった。多くの分科会（一部改廃、新規含む）が立ち上がり、すでになんらかのシンポジウムが開催済みまたは予定されている。その他で主な報告は以下。

基礎生物学委員会より

2018年1月22日に、基礎生物学委員会・統合生物学委員会・農学委員会・基礎医学委員会他との合同で提言「生物多様性条約及び名古屋議定書におけるデジタル配列情報の取扱いについて」を发出した。今後政府、国際機関に働きかけを行っていく。

基礎医学委員会より

育成検討分科会で、大学、研究機関における、技術職員の待遇、減少、特任研究員の増加などにより、研究者の時間および研究環境の劣化が著しい現状を検討していく。

これについて全体で意見交換を行った。石川部会長より、今後第二部として、この問題をど

のように取り上げていくかを役員で考えていく旨の発言があった。

3. 日学に対する外部評価結果（H28.10～H29.9）への対応について（山極会長よりの審議依頼）（資料3, 4）

主に以下のような議論があった。

・国際学術団体への貢献について。

第二部関係の国際学術団体への貢献について以下のような報告があった。

IUBMB（国際生化学・分子生物学連合）（菊池）：生化学会が窓口、コンGRESを誘致

IUBS（国際生物学連合）（武田）：現在武田が会長として活動に貢献

FIP（国際薬学連合）（平井）：役員などを通して活動に貢献

CIGR（国際農業工学会）（澁澤）事務局長を出すなどして活動に貢献

IUNS（国際栄養科学連合）（熊谷）Council Member、Fellow などを通して活動に貢献

問題点として、これらの活動が国内で必ずしも十分に認知されていないという意見が出された。国内の認知度を上げる方策などを熊谷、澁澤、武田を中心に協議していくこととなった。

・提言等のフォローアップについて、および提言等発出のタイミングについて。

以下のことが議論され、確認された。

提言の対象と確実に届く方法（手交など）を明確にする必要性。

その後の政策に反映されているかをきちんとフォローアップすることの重要性。

提言等は期末前に十分余裕を持って出し、確実に相手方、マスコミへ届けることが重要。

また、山極会長より以下の発言があった。

会員の多くは政府関係の審議会を通して、政策へそれなりの影響力を持っている一方、特に総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）では学術会議の活動（提言を含む）の認知度が低い。今後メディア懇談会、各種記者クラブを通して、活動をアピールしていく必要がある。

4. 第二部にジェンダー関連分科会を設置する件について（三成副会長からの審議依頼）（資料3）

これについて議論を行った。石川部長が第二部内にジェンダー関連分科会を設置することを提案し、了承を得た。今後、役員、熊谷会員、名越会員が協議して、設置案を作ることとした。

5. 日本学術会議活動とSDGs（Sustainable Development Goals）の関係について（渡辺副会長からの審議依頼）（資料3、5）

小安会員（科学と社会委員会委員）、渡辺副会長よりSDGsの説明を受けて、第二部の取り組

み方について議論を行った。主な意見は以下。

- ・SDGs はよりよい社会を目指すための目標。
- ・SDGs でカバーされない学術分野もある。
- ・基礎科学は、興味、探究心に従って研究を進めるスタイルであり、予めSDGsのような目標を設定することは難しい。この場合、研究成果を社会実装する際の物差しとして使うべきではないか。
- ・社会への応用を目指す分野では、SDGs を研究の目標に設定することは研究意義の明確化につながる。
- ・SDGs は人類社会の目指す社会像を示すものであり、研究者がこれを理解することは重要。
- ・日本政府は社会の明確な未来像を描けていない。必ずしもSDGsによらない、日本社会(近未来像を、学術会議として、科学者として描くことを考えてはどうか。

6. 夏季部会・シンポジウム(8月5日(日)～6日(月)、福島開催)について(資料6)  
石川部長および安村会員より、夏季部会・シンポジウムを平成30年8月5-6日に福島県立医科大学で行うとの報告があった。

7. 各機能別委員会からの報告等について(資料7～11)

以下の機能別委員会の活動方針、活動状況について、委員会へ参画している第二部会員より説明があった。

科学者委員会(武田)(男女共同参画分科会(熊谷)、学術体制分科会(武田)、学協会連携分科会(石川)、研究計画・研究資金検討分科会(武田)、学術と教育分科会(平井))、および国際委員会(竹内)

科学と社会委員会(課題別審議等査読分科会、科学と社会委員会市民と科学の対話分科会、メディア懇談分科会、政府・産業界連携分科会)に関しては総会で山極会長より報告済み。

8. 各課題別委員会からの報告等について(資料12)

竹内副会長より、以下の委員会の活動方針、活動状況についての説明があった。

防災減災学術連携委員会、科学技術を生かした防災・減災政策の国際的展開に関する検討委員会、フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会。

9. 認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)の改訂について(資料13, 14)

厚生労働省・認知症施策推進室より、上記の戦略改定へ向けて日学より意思の表出に関する問い合わせを受けている。表出があれば参考とする等。32年度改定予定で、31年度内に表出する必要あり。特に資料13の7つの柱うちの⑥についての研究には、基礎研究が含まれる。これについて意見交換が行われた。

その結果、この問題は第二部だけにとどまらず、日本学術会議全体と問題と捉えるべきであるが、まずは第二部を中心に分科会を立ち上げる方針が了承された。関連する会員（遠藤、寶金、小松、山脇、磯部、岡部、伊佐、小川）と役員が協議して、分科会の設置案を作ることとした。

10. 第24期課題別委員会候補案（分野横断的な課題候補）について（資料15）

石川部長より、資料を基に各部より提案されている横断的課題の説明があった。この中で、三部より出されたセンチナリアン（百寿社会）に関する課題は、9の議論を受けて、第二部としても分野横断的な課題として捉えることができる。石川部長より、認知症・百寿社会の課題を日学として分野横断的な課題として幹事会へ諮ることが提案され、了承された。

11. 第二部における提言等の査読体制について（資料16）

石川部長より、前期の反省（期末に提言が集中、特定に会員に査読が集中）を踏まえて、新たな今期の第二部での査読体制が提案され、了承された。

12. その他

特になし。